

供 奴

文政十一年(1828)三月初演

作詞 二代目 瀬川 如臈

作曲 四代目 杵屋 三郎助

(後の十代目 六左衛門)

(二上り)

仕て来いな やつちや仕て来い今夜の御供

ちつと後れて出かけたが

足の早いに我が折れ 田圃は近道

見はぐるまいぞよ 合点だ

振って消しやるな台提灯に 御定紋付でっかりと

ふくれた紺のだいなしは 伊達に着なした 奴らさ

武家の気質や奉公根性

やれ扱 いったかな出しやしよない

胼や輝 踵や脛に 富士の雪程あるとても

何時限らぬ お使ひは かかさぬ正直 正道者よ

脇よれ頼むぞ 脇よれと 急ぎ廓へエー、一目散

息を切つてぞ駈け付ける

おんらが旦那はな廓一番隠れない丹前好み

華奢に召したる腰巻羽織

きりりとしやんと しやんときりりと 高股立の袴つき

後に下郎がお草履取つて 夫れさ 是さ

小気味よいよい六法振が

浪花師匠の その風俗に 似たか 似たぞ 似ましたり

扱／＼な 寛濶華麗な出立ち

(1)

おはもじながら去る方へ

はの字となの字の謎かけて

解かせたさの 八重一重

解けて嬉しき下臥しに

アアままよ 仇名がどう立たうと

人の噂も七十五日

てんとたまらぬ 露の化粧の初桜

「拍子合方」(鼓と三味線だけの合奏が入る)

(本調子)

見染め見染めて 目が覚めた

醒めた夕べの拳酒に ついついついさされた杯は

六、七、八でんす 九と云うて拂つた

貼った肩癖ちりちり 身柱 亥の眼灸がくつきりと

(2)

捻切り 絡げた千鳥足

手ツ首 掌しつかと握つた 石突

こりやこりやこりやこりや成駒 やつとこよんやさ

「拍子合方」(鼓と三味線だけの合奏が入る)

(二上り)

面白や 浮かれ拍子に乗りが来て

ひよつくり旦那に捨てられた

狼狽へ眼で提灯を

つけたり消したり 灯したり

揚屋が門を歩き過ぎる

〔文化譜の併記歌詞〕

(1)

おはもじながらさる方へ

ほの字とれの字を謎かけて

解かせたさの 三重の帯

解けて寝た夜はゆるさんせ

アアままよ 浮名がどうなると

人のうわさも七十五日

てんとたまらぬ 小褌とりやつたその姿

(2)

ねぢ切 おいどが真つ白で

手ツ首 掌しつかと握つた 石突

こりやこりやこりやこりや成駒 やつとこよんやさ

